

京都部落問題 研究資料センター通信

第21号

発行日 2010年10月25日（年4回発行）

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

三浦参玄洞の水平社記事について

「中外日報」を中心に——（一）

秋定嘉和

（京都部落問題研究資料センター所長）

三浦参玄洞

浅尾篤哉氏の編集した『三浦参玄洞論説集』（二〇〇六年六月、一文字工房発行、解放出版社発売）の紹介を行いたい。

三浦参玄洞（一八八四—一九四五）は、京都の宗教新聞「中外日報」の記者で骨のある宗教人であり、奈良の西光万吉や阪本清一郎の友人である。以前、『三浦参玄洞論説集』の序文をまかされ、その時に急ぎながら全文を読んだが、今回改めて再読した。今回の紹介は限られた紙数のためできるだけ原文引用を行いながら特徴ある箇所限定した。

まず、衝撃的なことは西光万吉の「断種論」であった。それは、「絶対避妊論」と題されていた。西光は差別と闘うため、当初から糾弾を述べていたのではない。むしろ断種の方を主張していたのである。自己のみならず周囲の被差別民の生殖まで否定したのである。三浦の批判と指導は重く、痛

切である。

部落の一青年は彼の周囲が無反省に祖先以来の多産を已めないで低劣な存在を矢鱈に地上に送り出すことを憤った。彼は遂にマルサスも新マルサスも一足飛びに飛び越へて直ちに絶対避妊論を高唱しだした。彼は無論出産を父の発情線に起生した偶然事と見做して居る。而して享楽が可能であれば生存の甲斐もあるがそれには物質的にも精神的にも極めて乏窮して居る彼の仲間には出産は啻に彼等自身を苦しむのみならず生れ来った嬰兒に対しては怖るべき罪悪を犯すことになるかと断じたのである。

実際彼が此主張をなすに至るまでの経路は人生の苦惨を嘗め尽したといふても過言でない程の者であった。彼は最初自らの一人を此部落から引抜かうとして散々に藻掻いた。

それ丈けでも可成り同情に価する感傷事であった。然も醜悪な運命はどこまでも彼につき纏ふて到頭嫌悪に耐へぬ陋巷に彼自身を再び見出すべく余儀なくされた。与へられたものは遂に受取らねばならぬ日が来た。彼は覚悟の臍を固めて専念に周囲の改善に着手した。県の矯風事業にもたづさはつた。役場の青年団の事業にも呼応した。而て最後に内容も外観も立派な組合事業を起して部落は漸次改善されて来た。然も前途は漠々として程は遠い。ふと気附いたのは上説の絶対避妊論である。

彼はいふ、「飲食の本能が最洗練された頂点は断食入定である、それと同時に生殖の本能は不生殖に達した時其最高相の雄姿に輝く、」と。而て諸般の改造運動も享楽が是れ丈け人類にとつて六ヶ敷題目になつて来ては一足飛びに断滅の方法をとるのが最も賢い。文化の最高相は実に此断無にありと叫ぶ。（二一年二月）

このような西光の自己否定をなぜ従来の西光や水平社研究史は重視しないのか。「荊冠」のトゲと黒血色の意味が問われなければな

水平社員の親たちとの対立

水平社のたちあがりに対して最も身近な人々（親達）の反対に対して三浦は述べる。

：むかしのことを回顧したらこれでも余程結構になつて居るのだとかいふやうなお説は若い人達にとつては何でもない話で彼等は唯今日をより善くしたいばかりなのです、又徐ろにとか、其中にとかいふ事も若い人達には耐へ難い間ぬるい事で今日までの事実が既にそんな事ではどうともならぬ世間だといふ事が忌々しい程に証明して居るぢやありませんか、あなた方には少々の世間の愛想が持みになつて、恚うして行けば真逆頭から小便をかけたにも来まいといふ皮相な安心があります。しかし其安心こそあなた方を侮蔑の谷に蹴落して永劫陽の照る世界へ引出さない悪魔なのです。あなた方も過去に於ては穢多といふ名称から新平民に、新平民から特殊部落に、特殊部落から細民部落或は後進部落といふようなケツタイな名称にまで世間を慣らはすべく

滑稽な努力をされて来ました。

そして世間は其度毎に厭な事ツだと苦笑しつゝも唯あなた方が蒼蠅いものだから素直に後から 附せらるゝ名称を呼び習ふてあなた方の怒りを避けることに注意して来ました。そしてあなた方は唯それ丈けでもう安心して居るのです。イヤ安心しやうといふのです。そんな浅薄な話があつたものですか！

穢多が假令華族の名称に変わつても世間の侮蔑が変わらなかつたら帰する所は同一ぢやありませんか。御目出度いにも程があるといふものです。若い人達は決してそんな悲惨な滑稽を繰返さうといふ野暮な精神をもつて居ませぬ。否寧ろ日本の民族史にそうした虐待された階級があつたといふことを光榮ある後日の歴史を飾らんが為に取残しておきたい位に考へて居ます。臭いものに蓋をするのがあなた方の過去の運動であつたら今の若い人達のは臭いものゝ存在をそのまま人間の自覚の化学液によつて浄化しやうといふ運動なのです。どちらが本当にあなた方を救ふ道であるか

といふくらゐのことはお判りでせう。

無論こうした運動には多少革命的色彩を帯びてくるといふ事は免れ難い事実です、しかしそれがよくないといふのは年寄の氣儘で今の時代は穩健とか平穩とかいふやうな生優しい文字のつく運動では何事も出来ない位に人の心がしぶとくなつて居ます（二三年二月）

この説得は反論が重なり、同人の親達の説得は失敗に終つた。後世、どのような条件で功を奏したか検証はこれからである。水平社員の親たちに対して一九二二年二月五日号では次のようにべている。その視線はきびしかつた。「彼岸」の世にまでつらなる途の御同行としての同志・門徒としてみていた。

それからあなた方と私共とを歯痒いまでに引離すものは親鸞聖人に対するお互の意見の喰違ひです。あなた方は御開山の御門徒として仮の世の事に齷齪するのはお恥かしい事だ、御勿体ない事だ、いづれはお浄土に参つたら一列平等の証りが開かれるのぢやものゝと云つた風な一面のみを眺

めて彼の御同朋御同行と仰せられた人間の自覚に生くる一面を見落して御座るのぢやないですか。苟も未は御浄土で同一味の証りを開く事を信樂する位の道連れが不合理な差別觀念によつて同朋を虐げて居るといふやうなむごたらしい事を平氣で見追しておくのは第一あなた方の信仰そのものをも正さねばならぬ事柄だと思ひます。（二三年二月）

また、一九二二年三月三日、水平社創立のさい三浦は「東西両本願寺は死せり」とし、「この崩壊した旧殻から果してどんな新芽が萌るのかを刮目して俟たう」と本願寺の将来に注目した。本山、末寺にいたるまで見通していた。

三浦はその立場上、多くの有名な人と部落問題について対話を重ねていた。その中で著名な人の談話内容を記しておく。まず、「差別撤廃に尽くす人々」として、著名な文化人寺田蘇人が上つている。「部落の人豪」など評判の書で世上、名の売れた人物である。その住所が工場街の一住宅で、三浦は「差別撤廃」を叫ぶ人にふさわしいと感動した。しかし「平等会」大会での運営、名士の扱いなど失望したと記している。なぜ東北に

生れ、北海道で十五年かかって開拓した「百余町歩」の土地を手放して運動に参加したのか、なぜ名士ばかりと交際するのか三浦の観察は痛烈である。大阪府嘱託の早崎春香が差別は部落と一般民の誤解としているのに不満をもち、再度あつたとき同席していた大原社研の高田の渡米中の黒人差別を例に、侮辱には闘うしかなかったことを紹介した。早崎は時間がたてば差別はなくなると主張、三浦は地方改善は狭い土地に分割する土政策がなく効果もないのになぜ「改善」できるのかと詰め寄っていた。(二年四月)

部落問題研究者にあてた痛點

ところで三浦は部落問題研究者に対して今日にいたるまで通用する肝心の点を、このとき述べていた(傍線筆者)。今日の客観主義的部落問題研究者が重視しなかったところである。

部落の研究者が問題の中心から外れて単なる貧民研究に渡つたときそこには経済的に無力な集団と智識的に蒙昧なグループとを見出すのみでこれを対象の全部として研究の歩武を進めた最後は必ず普通のソシアリズムに見る如き簡単にして且有りふれた結論にし

か到達しないのを常とする。

勿論部落の名称が嘗て「細民」の二字を冠して呼ばれた位それだけ貧民と同一境遇に措かれて居るにしろ部落の研究者は何処までもそれ自身の立場を見失はないで常に問題の中心を狙ふて進まねばならぬ。そしてその問題の中心といふは実に部落と部外の接触そのものにあることは同時に見落してはならぬ要件だと思ふ。若し然らずしてこの大切な接点を見免し徒らに解放の神様を気取つて三年五年彼等と同棲したところがその結果は僅かに貧民研究若しくは指導といふ底に止まつて毫も部落そのものに関する問題には触れずに終ることであらう。

筆者はこれまでに四五の都市に於ける部落研究者に出会ふてその所感を聞き質して見た。しかもその所懐は多く貧民窟調査程度のものであつて、或者は教育の興進により或者は産業の革新によりその他種々なる貧民救助的方法によつてこれが根本的解放が達成され得るものと断定して居るのに、尠なからず失望さゝれた。繰

階級闘争の意味について

返してもいふが部落解放問題は貧民救助問題と峻別せねばならぬ。しかもこれを研究せんとするものは先づこれを本當に知らねばならぬ。これを本當に知らんと欲するものは先づこれに同化せねばならぬ。すなはち仮に部落と部外の間は何か問題の生じたやうな場合でも一応や再応でなくいつまでも部落者の心になつて深く考へるだけの用意がなくてはならぬ。(二年六月)

また三浦によれば水平運動に關連した階級闘争については、一九二二年八月三日の紙面で次のような指摘をしていた。ロシア革命のような悲惨事よりは、もつと合理的な、文化的な解決がのぞましい。しかし死んだ平和より生きた闘争の方が真実を世の中に生みだすことの大切さを力説するのである。

一、愛せんが為には闘はねばならぬ。闘ふという事は決してよい気分の伴ふものではないが姑息な妥協に滞つて不真の奴隷となるより勝る事幾倍である事を信ずる。然して闘ふ事によつて諸種の煩惱に苦しめられる事は姑息な妥協によつて真実を晦ますよりは道

徳的価値に於て幾層倍優れているものと信ずる。

二、闘争の結果が共産社会の形式を齎来しやうとせまいとそれは私の関知する所でない。私は唯個人が真実に眼醒め得る過程として現在の資本主義制度があまりに邪魔をついてゐることに極度の反感を抱くものである。だから仮令共産社会が出現しても真実に生きんとする個人の自由が束縛されるやうであつたら飽迄闘ふ事を辞せぬ。

三、階級闘争を忌む宗教家は「昨日の如く存在せん事」を欲する以外自己に対しても他人に対しても更に愛念のなきものなることを断言する。愛があれば必ず其処に闘争が起らねばならぬことは現在社会の狀態であることをこゝに附言しておく。

四、階級闘争が長びくことは御互にとつて甚だ迷惑なことであるから出来るだけ手短かに終りたい。しかし其処には人為的にはどうすることも出来ぬ地上の制約があるから或は永久に闘争がつゞくかも知れない。しかし死んだ平和(固定した階級社会)よりも生きた

闘争の方がより多く真実を地上に生み出すものであるから吾人は結末を見ざる闘争そのものをも愛好したいと思ふ。

(二十二年八月)

初期水平社の糾弾について

初期水平社の糾弾について言論人がその区分や理屈付けをあれこれ述べたことについて、三浦はその曖昧な姿勢や発言にもきびしかった。

水平社の主張たる人間尊敬主義はあまりに漠然として居て取止めがない。或はその本能的な欲望の満足を主張するものか？或は又人間個々に具有する仏家に所謂仏性といふが如きものゝ尊重を意味するものか？若し後者であつたならば議論の余地はないが仮りに前者にあるものとすれば社会生活の公安を害し其秩序を紊る懼れがあるから可けない。

三浦は「人間的」なるものの語義をあれこれのべることを否定した。部外の人間同志がなすり合ふているような「論理」も「情誼」もない。「超批判的生命の躍進あり」のみであるとした。

次に近來各地に頻発する差別的争議に關し多くの論者は「是自ら墻するものなり、彼

私の溝渠をより深くするものなり、而して其結果は彼等の主張そのものを自ら裏切るに至る」とするやうである。此種の議論は水平社の創設以來諸多の凡非凡人によつて数々繰返された所であるが吾人は如斯愚論が未だにその跡を断たないのを深く悲しむものである。

然らば何故に吾人は此種の議論を目して愚論なりと断ずるかなれば、如斯所見を抱くものは畢竟現実に差別的待遇を受けつゝある一部同胞の心的情態を毫も思慮する所なくして恰も単なる個人同志の間に生じた係争事件であるかの如く見做してゐるからである。そして極めて複雑した人間の社会的感情を単に一片の論理で片付けて行かうといふ妄見に滯滞してゐるからである。試みに惟へ、同じ人間であり乍ら何等の理由なくして特殊の階級者として遇され剩へ諸種の侮蔑を含めたる隠語を以て呼称された場合、仮令相手の不都合を詰るも彼は慣習を楯にとりて巧みに言を左右にし敢て自らの非を改めんとせず是を法の処断に仰がんとす

る術さへない時被蔑者のとるべき態度は果して那辺にあるであらう？是を多数同勢の力によつて糾弾し飽迄損傷された人間の名譽の為に闘ふのは蓋し当然ではなかるうか？(二十三年三月・四月)

と多数の差別者に対して被差別者は糾弾でもつて對抗する理由を述べ、解決が個人的なものでなく社会的解決によるものであると主張した。

水平運動と無産階級運動とのちがいに

その差異を明解にすることを次のように述べた。

即ち余他の無産階級運動は純然たる経済的若しくは政治的闘争であるが水平社運動には仮令これがあつてもそれは第二義的のものであつて決して本来の運動精神の主体でないことを社会に明示せねばなるまい。故に数々開かるゝ其宣傳会に際しても従來の如き単純なる階級闘争的言論をなすことは力めて之を避けその第一義的主張をなす上に於てもつと熾烈であつて欲しいと思ふ。

さらに経済的、政治的運動のあとに「因襲的差別觀念が残存」す

る可能性があり、それをなくするための「独裁的威力」の養成を説いたのである。今日を見通す卓見といえよう。

しかし吾人をして忌憚なくいはしめば水平社はかくする前に先づ自らの独裁的威力を十分に養ふて置かねばならぬ。所謂エタ王国の建設をして如実に完成しておかねばならぬ。

然らざれば折角共同戦線に立つて花々しい効績を挙げた後も尚依然として因襲的差別觀念が残存する憂ひがあるからである。元より社会改造の過渡期に於ては各方面の運動者は夫々共通した時代精神に対する連帯責任があるから其執れを先にして執れを後にするといふが如き判然たる規範的区分はないが水平社の立場に於ては特にこれだけの覚悟が予め準備されて居らねばならぬと思ふ。(二十三年三月・四月)

これまでの運動に対し次のような反省と前進の指針をのべている。三浦にとつて「第二期」の闘争とは運動内部の弱さにあつた。

水平社の組織を是非共一度初期の集中的合同主義に引直し同時に有名無実の府県別代表者制を改めて地方水平社は個々

に連盟本部に直属するやうにしたい。そして最初第一線に立つて居た人達は運動精神の弛緩せざる以上要らざる気兼ねや斟酌を已めて最後まで戦線の拡充に努力すべきである。同時に最注意を払はれたいことは軍資金の調達法であつて是は当然地方水平社から年額若しくは月額を一定して必ず納付せしむべきである。若し此一事にして行はれないとして見ると吾人は徒らに声を大にして水平運動呼ばりをして見たところが果して誠意のあるものなるや否やをさへ疑はざるを得ない。兎に角此外に吾人は現在の戦線を整理すべき途がも一つとないことを断言する。

今は水平運動は初期の啓蒙時代を去つて第二期に入ったと自称して居る。然し吾人をして直言せしむれば何処に果して第二期に入つたらしいしるしがあるのかと逆問したい。演説屋が頻りに輩出して相不変乳臭い警官攻撃を繰返したり徒らに荒ソポイ言論のみを弄していかさま英雄気取りで賭下がつて居るのが第二期に入つたしるしか？特に憂ふべきは人間礼讃をモットーとする同人間に於て公私の席上に或は陽に或は陰に他を傷け己れのみ高揚せんことを専らとして居る如き人間の存在することである。是等は実に唾棄すべき水平社中の害虫であつて如斯奴輩の横行を看過して居るといふ事のそれが既に水平社同人全体の闘志が疲憊した証左ではないか。初めに云つた如く吾人は水平運動を全人類の精神生活に繋がつた大きな解放運動と見て居る丈けに特に如上の頹勢を悲しむものである。如何なる批難攻撃を予想しても是だけのことは敢ていふておかねばならぬと信ずる。

兎に角水平運動の必然性を信ずるほどの同人は此際起つて急々戦線の整理を断行せよ。吾人は曾て第一回大会直後某県下に於ける中央委員会の席上に於て「水平社は外部から障害をうけて倒れることは絶対にないが若し仮に倒潰の未来があるとすれば此主動力は水平社同人そのものゝ中にある」ことを断言しておいた。不幸にして此断言が意外に早く実現するなきや（二五年三月）

水平社青年同盟批判

三浦は全水左派（青年同盟）批判に立ち上がった。

頃者某紙の報ずるところによると水平社青年同盟は「従来の徹底的糾弾は精神的に反動的なものであるから一個人を相手として罪をせむることをやめ、これは差別的言動を反映した社会的意識思想そのものゝ罪として専らその教育と無産者としての意義を植へつける新戦法をとることを申合せた」と記されて居るが、右の文意は甚だ不明瞭であるが仮に「従来の徹底的糾弾が固人的に用ゐられて居たのは誤りであつたから今後は差別的言動を反映した社会的意識そのものを糾弾し教育する」といふ意味と解釈するのが正当ならば吾人は前記の理由によつて青年同盟諸君の再考を促したいと考へる。（若し同盟が解散したのが事実ならばその構成員たりし一人一人に）更に前掲記事に「従来の徹底的糾弾は精神的に反動的なものであるから一個人を相手として罪をせむることをやめる」云々が果して諸君によつて申合はせられた事であつたならばあまりに其理由の幼稚なのに驚かざるを得ない。所謂徹底的糾弾が精神的に反動的なものであることは十二分に承知しながらも此所に出でずには居られないところに水平運動独自の立場がありその絶対性があつたのではあるまいか。之は初期の運動者に於てかなり悩ましい苦練をもつて既に解決された問題であつたと思ふ。要するに唯物的機械観は最後に至つて人間の責任を見失うものであり惹いては一切解放運動の生命そのものまでも機械化するものである。人間礼讃をモットーとする水平運動の闘士たちが之を撰入れることは容易ならぬ危険を伴ふものであることを附言したい。（二五年一〇月）

青年同盟機関紙『選民』などに多量に掲載をみた「糾弾」は「反動的」なるものとの説に対する三浦の反論である。その人間主義的立場からするものとして数少ない論文であるが、大勢とならなかつた。しかし、このような立場や主張はやがて人々をひきつけていくのである。（次号に続く）

映画の紹介

『キヤタピラー』(若松孝二監督、二〇一〇年)

渡辺 毅

(東九条ダシ事務局長)

論すべき問題点が多々ある。と、若松孝二監督作品『キヤタピラー』を観終わって思ったので、直後に友人Nに会ったさい、さっそく議論を吹っかけた。もともと『キヤタピラー』を観ることを私に勧めたのはNである。Nは「あの映画は障害者と性について描いているよ」と云っていた。私とNはかつて脳性麻痺のTという男の介助を共にしていたことがある。Tはよく「俺は障害者と性について語るんだ」と、不明瞭な言語でうそぶいていたが、その機会を得ぬまま四十になるかならずかで死んでしまった。Nはこの映画を観たときTのことを思い出したのかもしれない。

ね?」と、まずは投げかけてみたのである。ここから先、『キヤタピラー』演出に関する私の批評または感想の一端を披瀝しようと思うのだが、考えてみれば、この映画をご覧になつていない方もおられるはず。だからまず少くあらずじのようなものを紹介しておきたい。主演の寺島しのぶがベルリン国際映画祭で最優秀女優賞を獲つたことで話題になり、そういう映画作品がある、ということだけはご存じの方も多かるうが、内容は概ね以下の通り。

戦時下、ある農村に、中国戦線から一兵卒が帰還する。久蔵という名のこの兵士は、手脚を失い、聴覚と言語を喪い、頭部に爛れた火傷の痕を残した傷痍軍人の姿で帰還したのである。しかも、無惨なありていなればこそ、久蔵は、戦線での軍功めざましく、天皇陛下のおんため負傷した名誉ある兵士として讃えられ、「軍神」と持ち上げられる。武勲章と、久蔵の軍功を麗々しく報じた新聞記事と

が、「軍神」の「軍神」たる証しとして、異形と化した男と共に送り還されてきたのである。妻シゲ子は狂乱する。「あんなの久蔵さんじゃない!」と。だが、「軍神」の妻たる者は「軍神」の面倒を看なければならぬ。それが銃後の務めなのである。変わり果てた姿で仰向けに布団に横たわる夫は、気味悪い化物。その化物が、声にならぬ声で意思表示する。「え? : : あ、おしっこですか?」妻はあわてて探し出してきた渡瓶を、布団をめくり、夫の一物にあてがう。勢いよく響く放尿の音。化物は、それでも生きとし生ける人間なのであった。シゲ子の、「軍神」介護の日々が始まる。

生きとし生ける「軍神」は、妻の介護でむさぼるように物を食う。そして、むさぼるように妻の肉体を求める。妻は当初嫌悪を感じながらも、服を脱ぎ、大腿部以下を失くした夫の下半身にまたがる。妻の目線の先には武勲章と新聞記事。その上には天皇陛下の御真影。「軍神」の性欲に応えるのも、天皇陛下のおんため、銃後の務め。(武勲章と新聞記事はたびたび大写しされる―問題点1)

食って、性交して、排泄して、寝る、だけの「軍神」と、介護する妻と、二人きりの重苦しい日々が繰り返される。夫は、武勲章と

新聞記事を間近く見せてほしいと妻に合図を送る。妻はこれに従い、「軍神」の証しを夫に突きつける。いや当初は、突きつける、ではなく、ただ見せてあげる、だったのだ。徐々に「突きつける」というような気持ちの妻の内部に鬱積していく。夫が醜く生きながらえることに、妻の自分が營々と介護し続けることに、意味を与えている。「軍神」なる符牒。それにいつたか。夫婦二人きりの家の中にあつて、「軍神」は、食って性交して排泄して寝るだけの、手脚も言葉もないただの芋虫。そう、作品タイトル『キヤタピラー』とは芋虫のこと。「軍神」という称号がだんだん皮肉にしか思えなくなつてきて、シゲ子は、わざと勇ましい軍歌を口ずさむ。嫌がる夫に無理やり武勲章を付けた軍服を着せて、おもてへと連れ出す。村人はリヤカーに乗せられた久蔵を見て「おお、軍神様」と手を合わせる。シゲ子は、ただの芋虫が「軍神」と持ち上げられている皮肉なさまを、屈折した嗜虐的な感情で、ざまあ見ろ、と思っていたのであるうか。(頻出する「軍神」という言葉―問題点2)

妻は夫の上位者となつていく。騎乗位での性交を、妻は夫に、むしろ求めるようになっていく。家の中、他には誰もいない。二人の

間に子どもは産めない。子どもを産めない妻に、かつて夫は「うまずめ」と罵言を浴びせ、殴る蹴るの暴行を働いた。けれども今、「軍神」となった夫に殴る手はなく、蹴る脚もなく、夫は妻に組み敷かれている。女を征服することを当然とし続けてきた男が、手脚をもがれて女のなすがままにされようとすると、男の脳裡をよぎる映像。中国戦線で、現地を燃えさかる民家へと追い詰め、のしかかり凌辱し、欲情を満たせば斬殺した日本兵の映像。それは己れの姿である。(この映像はじつは作品冒頭にも出てくる)その己れが今、妻にのしかかられている。女が、女というものの総体が、己れに復讐しようとしている、と戦慄したのであるか。一物は妻え、久蔵は恐怖の呻きに震える。

それでも戦争は続いている。村の女がシゲ子に「軍神様にこれを」と、貴重な鶏卵を託す。「軍神」であることにはや耐えられなくなった久蔵は、性的不能者となった上、食うことも拒絶しようとする。だがシゲ子にしてみれば、「軍神」の耐えがたきを耐えてきたのは自分のほうだ。思わず激して、夫の口に、「軍神」への捧げ物の鶏卵を「食べなさいよ」と押しつける。なまなましい体液のように夫の貌を濡らす黄身と白身。妻はハッとす。悪いのは夫では

ないのだと、震えるぶざまな芋虫を抱きすくめる。

「軍神」はただの芋虫。妻は、「いっぱい食べさせてあげなさいや。食べて、寝て、食べて…」とうわごとのように呟きながら、暗い台所で菜を刻む。夫は狂ったように這いずり、泣きながら柱に己れの頭を打ちつける。「大丈夫よ、大丈夫だから、ね…」血まみれになった夫の貌を呆然と見やり、妻は、泣きたいような笑いたいような声で云う。「軍神様が、こんな貌になっちゃった…」

広島・長崎の原爆投下のニュース映像が流れる。死者数を示すテロップ。

夏の日。玉音放送。戦争は終わった。

芋虫は家を這い出して、浅い池の端まで辿り着く。池の面に映る己れの貌を見つめる。

一方、農作業をするシゲ子の表情には晴れやかさがある。「終わった!万歳っ!」

そのころ芋虫は、池にうつぶせに突っ伏していた。身動きしないそれは、死んだ、ということなのであるか。(問題点3)

ドラマはここで終わり、ニュース映像が流れる。BC級戦犯絞首刑の映像。東京大空襲の映像。死者10万人のテロップ。アジアにおける死者2千万、第二次大戦の全世界の死者6千万、のテロップ。

(問題点4)

ざっとこんな感じである。私が勝手に辿り直したあらずじであるから、重要な部分が抜け落ちていたりするかもしれない。この作品を観た別の人があらずじを語れば、全く違う印象のものになるかもしれない。そういうことは仕方ない。でも、このあらずじを諷んで『キャタピラー』は面白そうだと感じて下さる方が一人でも多ければいいとは思っている。実際、面白かったから。

途中途中に(問題点)というチェックを挿入したのは、これからそれらの箇所について、友人Nに語ったときの言葉で、私の批評を述べてみるつもりなのである。云うまでもないが(問題点)というのは、ダメだ、ということではない。議論の俎上に載せてみたいと思つた箇所、ということである。

まず冒頭で「東京大空襲だとか原爆投下だとかのニュース映像は、果たしてあの作品に必要だったと思うかね?」とNに投げかけたことを記したが、これは(問題点4)のことである。私は、『キャタピラー』は反戦映画だと断言していると思うが、反戦ということをもどんな切り口で表現しようとしているかが、作品の独自性であって、この作品は、「軍神」というレッテルを貼られて送還された傷痕軍

人とその妻の夫婦の営みを描く、というモチーフを切り口としているから面白いのである。二人の生活に、戦争の不条理は十分投影しているのである。原爆や空襲や戦犯処刑の映像を挿入したり戦死者数のテロップを流したりすることで、リアルな戦争の不条理にあえて言及する必要があるのだらうか、と考えてしまったのである。そんなものは余計だと思われるであろうことを、若松監督が想定しなかったはずはないので、余計と思われてもいいから、物語世界を取り巻いていた戦争総体の現実をどうしても突きつけておきたい、と監督が考えたと思えるしかない。観る者を物語世界から突き放す、かつてブレヒトが演劇論の中で唱えた「異化効果」みたいなことをしようとした、とも考えられる。これがいいとか悪いとかは云えない。演出家それぞれの考え方があるのみである。ただ私はNに「僕の趣味としては、あれらのニュース映像はなくてよかったと思う」と云った。物語のモチーフそのものが、それだけ魅力的だったということである。

砲火からも軍靴の響きからも遠く隔てられた農村で、性生活を含めた夫婦の日常に、じつは戦争がべつたりとまとわりついている。それがこの物語の核心なのである。かつて井上光晴の『明日』という

小説が黒木和雄監督によって映画化されたことがあったが、あれな
どは、一九四五年八月八日、原爆
投下の前日に、長崎市民がいかに
翌日に起こる出来事と無縁に生活
していたかを描いていた。戦争と
は無縁に見える部分をこそ描き切
ることが、有縁であることを強調
する、という演出も、『キヤタピ
ラー』の場合あり得た、と私は思
うのである。その点からすると、
これも良し悪しではなく私の好み
の問題に過ぎないのだろうか、
「軍神」というレッテルの扱い方
も、私は観ていて気になった。こ
れが(問題点1)および(問題点2)
であって、

「N君、僕はね、『軍神』とい
うこの作品のキーワードが、あま
りにも頻出し過ぎていてるように感
じたのだよ。いちいち言葉として
の『軍神』が、とりわけシゲ子の
口から出てくるたびに、描かれて
いる日常が停止してしまうように
思えたのだ。語句としてやたらに
語られる上に、武勲章と額に入れ
られた新聞記事のアップも多すぎ
る気がしたのだよ」

「監督はそれだけ観る者に、
『軍神』を意識させ続けたかった
んだらう？」とN。

「それが若松監督の演出だった。
それは分かるよ。しかしせっか
あのモチーフなのだから、『軍神』
だろうとなかろうと手脚も言語も

失くした夫を妻がたった独りで介
護する、性生活も含めた日常とい
うものは非常に重いわけで、その
重い日常を描くことにより徹しよ
うと思つたら、『軍神』という言
葉の表出はもう少し抑制すべきだっ
たのではないかと。あの不如意な
夫婦生活の原因が、何かと云うと
『軍神』に収斂されていく、とい
ういささか単純な構図が作られ過
ぎていたのではないかと思うのだ
よ。登場人物とりわけシゲ子にも
意識化されていないところで、あ
えて言葉にして語られないところ
で、彼らの桎梏が何であるかとい
うことは、生活の描写を通じて十
分見え得るものであったのだから

「軍神」の頻出には、ニュース
映像の使用と通じ合う「異化効果」
のねらいがあった、と私は解釈し
ているが、そこまでして戦争との
有縁性を強調しなくても、むしろ
物語のモチーフを生かして、登場
人物たちの生活を、戦争とは一見
無縁に進行するものとして描く部
分をより徹底させても、十分に意
図的に戦争を描くことになったで
あらう、と私は思っている。が、
これは好みの違い。

さて最後に(問題点3)である。
若松監督の演出は、敗戦直後、久
蔵に自死を選ばせたらしいのであ
る。らしい、というのは、私は観
たとき、久蔵が死んだのか死んで
ないのかよく判らなかつたのであ

る。というよりも、どう見ても死
んだようなのだが、ここで久蔵を
死なせるはずがない、と思つたの
である。これはじつは、友人Nが
『キヤタピラー』を観るよう私に
勧めたときに云つた、「あの映画
は障害者と性について描いている
よ」とも関わる重大問題をはら
んでいる。私は作品を観終わってか
ら映画館でパンフレットを買って
読んでみた。そうすると、若松監
督も久蔵を演じた大西信満も、久
蔵があそこで自死したのだとい
うことを当たり前のように述べて
いる。そうか、死んじゃつたのか。
そこで私はNにこう云つたのだ。

「君はあの作品を、障害者と性
について描いていると云つたが、
どうも僕にはそう思えない。思お
うとしたが、どうやら久蔵は死ん
でしまつたらしいし」

希望を云えば、殺さないでほ
しかったのである。戦後の久蔵は、
良くも悪しくも「軍神」というよ
すがからやがて解き放たれ(または
見放され)、彼ら夫婦を取り巻く状
況が好転するか暗転するかは予断
を許さないにせよ、「障害者」と
して生きていかざるを得なくなつ
たはずである。その先がある、と
考えたかつた。だが、若松監督は
そうせず、敗戦と共に「軍神」の
命を絶つた。「軍神」という存在
理由によって生き、あるいは苦し
み抜いた男に、他の存在のあり方

を許さなかつた。

障害者の心身をもつ久蔵ではあ
り、シゲ子との性交の場面に障害
者の性のある種の具体が描かれて
はいたけれども、あくまで久蔵は
「軍神」であつた。シゲ子は「軍
神」の妻であつた。戦争によつて
肉体と精神を破壊されながら「軍
神」の名のもとに生殺しに生かさ
れた人間存在に、若松監督は終末
を与えた。これは一つの温情的演
出であつた。

「救いを描いたんだよ、たぶん。
障害者であれば、死ぬことは救い
にならない。『軍神』だから、死
ぬことが救いになる。死ぬことだ
けが救いになるような存在を生み
出すのが戦争なのだ。人間の生を
描く物語としては、最後に自死と
いう決着をもつてくるのは不満だ
けれども、人間の生よりも、戦争
の不条理を描きたいという思いの
ほうが、たぶん勝つたんだらうね。
そう考えれば、ニュース映像の導
入も、『軍神』という言葉の頻出
も、当然の演出ということになる
ね」

「なんだ、君の批評も腰砕けだ
な」とN。
「まあ、批評と云つても、この
作品を肴に議論したかつただけだ
からね。肴としては申し分ない作
品だつたと、君も思うだらう？」

を知りたい(上) 織田紘二, 村崎修二
 謹厳実直、解放を求めて 中山英一さんを悼む 若宮啓文
 移民社会における差別・偏見構造を考えるために 藤原望

部落解放研究 189 (部落解放・人権研究所刊, 2010. 7) :
 1,400円

特集 実態調査にみる今日の大阪の部落

不安定化する都市部落の若年層 2009年住吉地域労働実
 態調査から 妻木進吾/大阪における部落の変化と女性
 若年層 大阪府連女性部調査から 内田龍史/部落の乳幼
 児の実態と保育の課題 大阪チャイルドネットの調査か
 ら 玉置哲淳/2006年度・大阪府内識字学級活動状況調
 査からみる現状と課題 現実に合わせて展開する学級の
 姿が浮き彫りに 部落解放・人権研究所識字部会

S県K地域における母子世帯の現状 堤圭史郎

多言語環境に育つ子どもたちの母語保持伸張と日本語習
 得 下 実態調査から見えてきたこと 櫻井千穂

部落史研究報告集 14 (八幡浜部落史研究会刊, 2010.
 5)

神宮通り子ども会のあゆみ 3 PTA同和教育部と福祉会館
 現地学習 菊池正

活躍する盗賊番一『伊予小松藩会所日記』より一 水本
 正人

映画を通して学ぶ人権問題～「砂の器」(松本清張:原
 作)と「橋のない川」(住井すゑ:原作)～ 五藤孝人
 受け継がれた藤樹学と陽明学一門人たちと大洲藤樹会の
 歩み一 五藤孝人

部落問題研究 193 (部落問題研究所刊, 2010. 6) : 2,1
 87円

第47回部落問題研究者全国集会報告

全体会 身分と身分的周縁について 塚田孝

歴史1分科会

近世後期阿波における「他国無切手・胡乱者」統制と四
 国遍路一打廻り・番非人・御救小屋一 町田哲/「城付
 かわた村」体制の解体過程一和歌山藩領の事例一 藤本
 清二郎

歴史2分科会

地域史のなかの近代都市史研究—その方法と課題— 原
 田敬一

現状分析・理論分科会

奈良県生駒市の「同和施策見直し検討委員会」提言につ
 いて 丹羽徹/鳥取県における同和施策見直しの現状と
 終結にむけた課題 田中克美/福岡県における同和行政
 終結の取組み 植山光朗

教育分科会

人権教育への一考察—教育・学習場面における人権に関
 する知識・理解、人権感覚や人権意識の涵養をどう考え
 るか— 生田周二/人権認識を育てる教育実践 井上治夫
 /市民性を育む教育プログラム—NP0法人北摂こども文
 化協会の取り組みを通して— 立石麻衣子

文芸分科会

西口克己『山宣』—文学研究からの評価の試み— 秦重
 雄/新たなる山宣像を目指して—周辺研究の展開 島崎
 こま子・新聞『山城』・小林多喜二など一 本庄豊

ライツ 135 (鳥取市人権情報センター刊, 2010. 8)

今月のいちおし!! 『何が不自由で、どちらが自由か〜
 ちがうことこそばんざい〜』(牧ロー二著) 川上学

ライツ 136 (鳥取市人権情報センター刊, 2010. 9)

今月のいちおし!! 『これから「正義」の話をしよう』
 (マイケル・サンデル著) 福壽みどり

リベラシオン 139 (福岡県人権研究所刊, 2010. 9) : 1,
 000円

特集 戦いの記憶を刻む〜終戦から65年

筑紫野市「社会科学習カリキュラム」作成にかかわって
 ~中学校社会科公民での「結婚差別」授業へのこだわり
 ~ 藤本勝徳

福岡部落史研究会創立35周年・福岡県人権研究所設立
 5周年記念企画展の記録 下 石瀧豊美

映画紹介 「パッチギ!」(井筒和幸監督, 2004年) 船
 津建

和歌山研究所通信 37 (和歌山人権研究所刊, 2010. 7)

紀州藩松坂領における非人番及び惣廻りについて 寺木
 伸明

2010年度部落史連続講座 PART2

第1回 11月26日(金) 続 川の流れに人の身は 六条河原の幕末維新

辻 ミチ子さん(元京都文化短期大学教授)

第2回 12月10日(金) 京都市東九条におけるスラム対策と同和行政

高度成長期の部落問題と政策的認識

山本 崇記さん(立命館大学非常勤講師)

◇時間: 午後6時30分~8時30分◇場所: 京都府部落解放センター2階 実習室◇参加費: 無料
 ~ 参加希望の方は電話・FAX・電子メールでご連絡ください ~

であい 582 (全国人権教育研究協議会刊, 2010.9) : 150円

人権のまちをゆく 51 島根県出雲市フィールドワーク
少数点在の暮らしをたどって

人権文化を拓く 159 生徒を見守ることの意味 野田龍三

ねっとわーく京都 260 (ねっとわーく京都21刊, 2010.9) : 500円

同和レポート 京都市の「同和行政」—変化は本物か 総
点検委員会報告後の動きを追う 寺園敦史

ノートル・クリティーク 3 (ノートル・クリティーク編
集員会刊, 2010.5) : 1,000円

1960年代京都における沖縄返還運動—佐次田勉氏に聞く
— 櫻澤誠

書評 高野昭雄著『近代都市の形成と在日朝鮮人』 山本
崇記

ねっとわーく京都 261 (ねっとわーく京都21刊, 2010.10) : 500円

隔ての海〜ハンセン病の島をカヤックでめぐる旅〜 寺
園敦史

ヒューマンライツ 268 (部落解放・人権研究所刊, 2010.7) : 525円

走りながら考える 111 私の生き立ち・パート3—自立意
識を育ててくれた— 北口末広

大学における、これからの同和・人権教育、研究のため
に 若手研究者が先輩研究者に学び・考える 5 中川喜代
子先生 松波めぐみ

書評 大森直樹編『子どもたちとの七万三千日 教師の生
き方と学校の風景』 吉村和彦

はらっぱ 310 (子ども情報研究センター刊, 2010.9)

特集 第35回総会記念シンポジウム 障害があってもなく
ても、ともに学びたい

ヒューマンライツ 269 (部落解放・人権研究所刊, 2010.8) : 525円

アカデミック・ハラスメント防止対策における相談員の
役割 御輿久美子

走りながら考える 112 私の生き立ち・パート4 価値観
が転換した高校時代 北口末広

大学における、これからの同和・人権教育、研究のため
に 若手研究者が先輩研究者に学び・考える 6 領家穰先
生 内田龍史

ヒューマンライツ 270 (部落解放・人権研究所刊, 2010.9) : 525円

走りながら考える 113 私の生き立ち・パート5 部落解
放運動へ突入 北口末広

大学における、これからの同和・人権教育、研究のため
に 若手研究者が先輩研究者に学び・考える 7 門田秀夫
先生 宮前千雅子

ジェンダーで考える教育の現在 41 分断と対立を乗り越

えるために〜『恥と名誉』との出会いと部落女性の聞き
書きから〜 熊本理抄

[ひょうご部落解放・人権研究所]研究紀要 16号
(ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2010.3) : 1,000
円

新・高松の歴史と生活 上の島部落史研究会
兵庫県融和運動史関連新聞記事集成 2 1924 (大正13)
〜1925 (大正14) 年 高木伸夫

部落解放 633号 (解放出版社刊, 2010.7) : 1,050円
第36回部落解放文学賞

部落解放 634号 (解放出版社刊, 2010.8) : 630円
特集 「大逆事件」100年

本の紹介

『続 悲田院長吏文書』の刊行に寄せて その編集後記な
るもの 小野田一幸 / 『発達につまずきがある子どもの
子そだて』 (湯汲英史編著) / 『八尾市人権協会物語』
(奥田均著) / 『これからの「正義」の話をしよう』
(マイケル・サンデル著) / 『「生存者」と呼ばれる子
どもたち』 (宮田雄吾著) / 『大逆事件』 (田中伸尚著)
/ 『ゲイ・アイデンティティ』 (デニス・アルトマン著)
性暴力根絶の包括的な法律システムを DV家庭における
性暴力被害の実態 近藤恵子

識字運動で学んだこと 福岡県・浦の谷で識字が始まっ
たころ 堀内忠

崇仁小学校の閉校、そしてまちづくり 柳原銀行と明石
民蔵の生き様に学ぶ 山内政夫

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 27 第4章 (終
章) 近世、地縁的社会の展開と被差別民 藤沢靖介

部落解放 635号 (解放出版社刊, 2010.9) : 630円
特集 人権教育と部落問題学習

本の紹介

『島嶼沖縄の内発的発展 経済・社会・文化』 (西川潤,
松島泰勝, 本浜秀彦編) 与那嶺功 / 『アラブ、祈りと
しての文学』 (岡真理著) / 『それでも、日本人は「戦
争」を選んだ』 (加藤陽子著) / 『韓国併合百年と「在
日」』 (金賛汀著) / 『高木顕明の事績に学ぶ学習資料
集』 (解放運動推進本部 [ほか] 編) / 『LLブックを
届ける やさしく読める本を知的障害・自閉症のある読
者へ』 (藤澤和子・服部敦司著) / 『日本辺境論』 (内
田樹著)

東九条の歴史と希望の家の50年 前川修

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 28 第4章 (終
章) 近世中後期の動向—「平人」と異種 藤沢靖介

部落解放 636号 (解放出版社刊, 2010.10) : 630円
特集 「発達障害」はいま

World Open Heartの挑戦 「犯罪加害者家族」支援 阿部
恭子

猿・縁・奇縁 対談 村崎修二が訪ねる 1 「猿まわし」

究所刊, 2010. 3)

「長野県部落問題関係記事概要」こぼれ話 4 人間解放に共感を寄せた人々 川向秀武

両角平左衛門に関する補遺 川向秀武

身同 30号 (真宗大谷派解放運動推進本部編, 2010. 6) : 1,000円

2009年度人権週間ギャラリー展シンポジウム 大谷派における解放運動の歴史と課題 2 一朝野温知 (李壽龍) 宗教に差別のない世界を求めて— 水野直樹, 朝治武, 泉恵機, 阪本仁

死刑制度と念仏者 平川宗信

宗教的救済意識に関する考察 3—「『楽土』としたいという悲願」という言葉より— 訓覇浩

「今」も遠き「ふるさと」—「ふるさと」を共に回復する取り組みを— 大屋徳夫

大谷派における部落解放運動の継承を願って—「異なるを歎く」をめぐって 山内小夜子

「女性室」の歩みと願い 本多祐徹

「真宗大谷派における部落差別実態調査報告書」から見えてきたこと 阪本仁

月刊スティグマ 168号 (千葉県人権啓発センター刊, 2010. 6) : 500円

特集 公立高校の希望者全入を求めて 1

明治維新後遺症としての日本人…差別問題をすべての人のものにするための試論 13 明治維新後遺症、前近代健忘症としての高齢者と子どもの問題 鎌田行平

月刊スティグマ 169号 (千葉県人権啓発センター刊, 2010. 7) : 500円

特集 公立高校の希望者全入を求めて 2

明治維新後遺症としての日本人…差別問題をすべての人のものにするための試論 14 「循環の思想」を取り戻す 鎌田行平

生存学 2 (立命館大学生存学研究センター編, 2010. 3) : 2,200円

特集1 労働、その思想地図と行動地図

座談会 生産/労働/分配/差別について 天田城介, 小林勇人, 齊藤拓, 橋口昌治, 村上潔, 山本崇記 / 「労働運動の社会運動化」と「社会運動の労働運動化」の交差

「若者の労働運動」の歴史的立場づけ 橋口昌治 / 「主婦性」は切り捨てられない 女性の労働と生活の桎梏にあえて向き合う 村上潔 / 同和行政が提起する差別是正の政策的条件 差別と貧困を射程にした社会政策に関する予備的考察 山本崇記

地域と人権 1090号 (全国地域人権運動総連合刊, 2010. 7. 15) : 150円

国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 7 丹波正史

地域と人権 1091号 (全国地域人権運動総連合刊, 2010. 8. 15) : 150円

法務省、人権救済機関設置で「中間報告」—なお曖昧な内容で懸念払拭されず—

国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 8 丹波正史

地域と人権 1092号 (全国地域人権運動総連合刊, 2010. 9. 15) : 150円

立花町差別捏造事件を「捏造」するもの 1 週刊ポスト “連載「糾弾」” 批判 植山光朗

国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 9 丹波正史

月刊地域と人権 317 (全国地域人権運動総連合刊, 2010. 7) : 350円

これはおかしいよ—行政に人の心を見抜けますか 森元憲昭

月刊地域と人権 318 (全国地域人権運動総連合刊, 2010. 8) : 350円

特集 第6回地域人権問題全国研究集会 全体会

月刊地域と人権 319 (全国地域人権運動総連合刊, 2010. 9) : 350円

特集 第6回地域人権問題全国研究集会 第1分科会

地域と人権京都 580号 (京都地域人権運動連合会刊, 2010. 9. 1) : 150円

特集 09年活動報告及び2010年運動方針

ちくま 472 (筑摩書房刊, 2010. 7) : 100円

青春の光芒—異才・高橋貞樹の生涯 38 第八章 密出国でモスクワ留学へ 7 沖浦和光

『賀川ハル史料集』刊行について 3 ハルの魅力 三原容子

ちくま 473 (筑摩書房刊, 2010. 8) : 100円

青春の光芒—異才・高橋貞樹の生涯 39 第八章 密出国でモスクワ留学へ 8 沖浦和光

ちくま 474 (筑摩書房刊, 2010. 9) : 100円

「暴力団排除」と言論規制 宮崎学

青春の光芒—異才・高橋貞樹の生涯 40 第九章 上海・ウラジオストック・シベリア鉄道 1 沖浦和光

であい 580 (全国人権教育研究協議会刊, 2010. 7) : 150円

在日朝鮮人の本名問題から何に気がつくべきか 歴史の節目100年を迎えて考える日本の植民地支配 金光敏

人権のまちをゆく 50 柳本飛行場跡フィールドワーク〜朝鮮人強制連行の歴史を風化させないための緊急学習会〜

人権文化を拓く 157 二年間の中国生活から、垣間見た人権問題 山口成幸

であい 581 (全国人権教育研究協議会刊, 2010. 8) : 150円

人権文化を拓く 139 支援の方向性と就労 大西祥恵

こべる 209 (こべる刊行会刊, 2010.8) : 300円

ひろば133 「差別・被差別関係」論へー「両側から超える」構想の意義 平川茂

播州からの便り5 私は部落差別をどうとらえてきたか 福岡ともみ

いのちを生きる33 自己申告票という怪物 長谷川洋子
記憶の旅から明日へー写真と文 小林茂

こべる 210 (こべる刊行会刊, 2010.9) : 300円

ひろば 134 「ADHDという憂鬱」—その後 中西仁
こころのつぶやき 1 就職希望の学生に伝えたいこと 早川万年

いのちを生きる 34 学校の悲鳴 長谷川洋子
記憶の旅から明日へー写真と文 小林茂

こべる 211 (こべる刊行会, 2010.10) : 300円

座談会 生き方を学んできた—尼崎・ボランティアグループ「園」の22年

記憶の旅から明日へー写真と文 小林茂

コリアンコミュニティ研究 1 (こりあんコミュニティ研究会刊, 2010.6)

特集 マイノリティ空間の記憶をどう伝えるか

龍王宮の空間が語るもの 宮下良子／龍王宮・箱作・済州島—水辺の賽神—飯田剛史／大阪済州人の祈り—ある済州島出身女性の事例から—高正子／済州島出身在日一世の習俗の断片 玄善允

戦後における在日コリアンによる養豚経営と地域社会—和歌山県新宮市を事例に—本岡拓哉, 柴田剛, 藤井幸之助, 全ウンフィ

ウトロ: 強制立退きから新しいまちづくりへ 斎藤正樹
日本の都市における外国人集住地区のまちづくりとそのコミュニティに関する研究—オールドカマーズ・在日コリアンを事例として—李度潤

書評

『近代都市の形成と在日朝鮮人』(高野昭雄著) 朴実／『北朝鮮へのエクソダス「帰国事業」の影をたどる』(デッサ・モーリス・スズキ著) 柴田剛／『民族関係と地域福祉の都市社会学』(二階堂裕子著) 平川隆啓

こりあんコミュニティ研究会研究会通信 6号 (こりあんコミュニティ研究会刊, 2010.8)

戸手四丁目河川敷地区の暮らしの記憶 3 まちの経営 新井信幸

狭山差別裁判 414号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2009.9) : 300円

野間宏と関巡査部長問題 8 庭山英雄

BOOK 『官製ワーキングプア』(布施哲也著) 庭山英雄

狭山差別裁判 415号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2009.10) : 300円

特集 可視化と証拠開示の法制化を

野間宏と関巡査部長問題 9 庭山英雄

狭山差別裁判 416号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2009.11) : 300円

特集 冤罪と自白

虚偽自白による冤罪はなぜおきるのか インタビュー 浜田寿美男

野間宏と関巡査部長問題 10 庭山英雄

試行社通信 287 (八木晃介刊, 2010.9)

解放運動の命運

社会科学 88号 (同志社大学人文科学研究所刊, 2010.8) : 1,000円

日本植民地研究の回顧と展望 朝鮮史を中心に 板垣竜太・戸邊秀明・水谷智

人権21 調査と研究 207 (おかやま人権研究センター刊, 2010.8) : 650円

特集 子どもの貧困

特集 河野通博先生を悼む

人権と部落問題 804 (部落問題研究所刊, 2010.8) : 630円

特集 日米安保条約50年と国民生活

文芸の散歩道 塩見鮮一郎著『破戒という奇跡』を読む 川端俊英

本棚 山田稔著『ともに希望を紡いで—ある高校教師の戦後史—』 畦地享平

人権と部落問題 805 (部落問題研究所刊, 2010.9) : 630円

特集 出版・報道にみる部落問題の現在

出版・報道にみる「部落差別」認識 奥山峰夫／『差別と日本人』にかかわる角川書店への申し入れ 新井直樹／歴史と現在に不誠実な「私小説」—『太郎が恋をする頃までには…』を読んで 三枝茂夫／『朝日新聞』竹田の子守唄報道に思うこと 川部昇／A新聞「差別を越えて」の連載記事について 栗原昇

現地報告 滋賀県・東近江市 同和地区問い合わせ事案を考える 石垣敏昭

文芸の散歩道 夏目漱石と広瀬中佐 水川隆夫

豊田慶治先生を偲ぶ 奥山峰夫

人権と部落問題 806 (部落問題研究所刊, 2010.9) : 1,155円

特集 住民自治と同和行政の終結

京都市における同和奨学金問題 井関佳法

部落問題をめぐる主な動き (2009年4月～2010年3月)

2009年度部落問題研究所定期誌総目次

じんけんぶんかまちづくり 28 (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2010.9)

私論「部落問題観を変えるために」 佐々木寛治

報告 2010年度第1回「部落問題は今、研究会」より 部落問題は何処へいくのか? 八木晃介さん講演録概要

信州農村開発史研究所報 111号 (信州農村開発史研

ぶらくを読む 55 九州地方の部落史研究・現場を牽引してきた福岡部落史研究会35年の終焉に立会う 湧水野亮輔

解放新聞 2485号 (解放新聞社刊, 2010.9.13) : 80円
解放の文学 53 土俗の闇に戦慄する心 柳田国男と『遠野物語』 音谷健郎

大逆事件から考える 高木顕明を軸にして 3

解放新聞 2486号 (解放新聞社刊, 2010.9.20) : 80円
大逆事件から考える 高木顕明を軸にして 終

解放新聞 2487号 (解放新聞社刊, 2010.9.27) : 80円
山口公博が読む今月の本

『兄弟の江上・下』(イヒウ原作, 朴仙容編訳) / 『韓国の若者を知りたい』(水野俊平著)

今週の1冊 『攘夷の幕末史』(町田明広著)

解放新聞大阪版 1835号 (解放新聞社大阪支局刊, 2010.8.2) : 70円

大阪の部落史を歩く 13 大都市大坂の誕生と被差別集落の形成 上 『貧人太平記』の語る世界 のびしょうじ

解放新聞大阪版 1838号 (解放新聞社大阪支局刊, 2010.8.30) : 70円

大阪の部落史を歩く 14 都市大坂の形成と渡辺村の成立 下 役人村という性格 のびしょうじ

解放新聞大阪版 1842号 (解放新聞社大阪支局刊, 2010.9.27) : 70円

大阪の部落史を歩く 15 集落・旦那場株・寺三位一体 河内更池村の成立 のびしょうじ

解放新聞改進黨 403号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2010.9.20)

コミセン転用計画の説明会に対する改進黨支部意見表明

解放新聞京都市版 226号 (部落解放同盟京都市協議会刊, 2010.8.1) : 150円

奨学金・コミセン京都市説明会

解放新聞京都市版 227号 (部落解放同盟京都市協議会刊, 2010.9) : 150円

私たちは今、何をすべきか—これからの部落解放運動—

解放新聞広島県版 1997号 (解放新聞社広島支局刊, 2010.7.15)

第62回県連大会一般活動方針(案)

語る・かたる・トーク 185 (横浜国際人権センター刊, 2010.7) : 500円

わたしと部落とハンセン病 56 林力

信州の近世部落の人びと 62 松本藩領内の部落の人びとが担った役割 斎藤洋一

同和問題再考 115 賀川豊彦と部落問題 2 田村正男
部落差別の現実 96 ネット型行動 1 江嶋修作

語る・かたる・トーク 186 (横浜国際人権センター刊, 2010.8) : 500円

わたしと部落とハンセン病 57 林力

信州の近世部落の人びと 63 「口上」で申し渡された部落の人びとの役目 斎藤洋一

同和問題再考 116 賀川豊彦と部落問題 3 田村正男

部落差別の現実 97 ネット型行動 2 江嶋修作

語る・かたる・トーク 187 (横浜国際人権センター刊, 2010.9) : 500円

わたしと部落とハンセン病 58 林力

信州の近世部落の人びと 64 斎藤洋一

同和問題再考 117 賀川豊彦と部落問題 4 田村正男

部落差別の現実 98 ネット型行動 3 江嶋修作

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより 21 (カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター刊, 2010.7)

わたしたちの中にあるもの 前川修

かわとはきもの 152 (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2010.6)

靴の歴史散歩 97 稲川實

皮革関連統計資料

関西大学マイノリティ研究センターニュースレター Boundary 6 (関西大学マイノリティ研究センター刊, 2010.8)

研究員による著書紹介 『ドイツのマイノリティー人種・民族、社会的差別の実態』 佐藤裕子

京都市政史編さん通信 38 (京都市市政史編さん委員会刊, 2010.7)

片岡直温と京都 3 奈良岡聰智

歴史を学ぶ、歴史に学ぶ 平竹耕三

大正期京都の町の共有財産と“税” 秋元せき

京都部落問題研究資料センター通信 20号 (京都部落問題研究資料センター刊, 2010.7)

報告 2010年度部落史出張講座 地元で学ぶ地元の歴史 in 崇仁

本の紹介 竹沢尚一郎著『社会とは何か システムからプロセスへ』 田中和男

現代史が持つ意義と重み 希望の家創立50周年と東九条山本崇記

収集逐次刊行物目次 (2010年4月~6月受入)

グローブ 62 (世界人権問題研究センター刊, 2010.7)

米田庄太郎についての「うわさ」のポリティックス 田中和男

近江八幡の手作り靴関係資料の歴史と製品 仲尾宏

国際人権ひろば 92 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2010.7) : 350円

特集 アジアのLGBT (レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダー)

国際人権ひろば 93 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2010.9)

特集 日韓の難民対策の現状と展望

収集逐次刊行物目次 (2010年7月～9月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

朝田教育財団だより 13 (朝田教育財団刊, 2010. 7)

城守昌二前理事長のご逝去を悼む 松井珍男子

地元紙に見る部落内からの情報発信 松井珍男子

「皆山教育」を振り返る 坪井良夫

IMADR-JC通信 163 (反差別国際運動日本委員会刊, 2010. 8) : 750円

特集 日本の人身売買撤廃への課題と今後の取り組み

ウィングスきょうと 99号 (京都市女性協会刊, 2010. 8)

図書情報室新刊案内

『大人になる前のジェンダー論』(浅野富美枝[ほか]編) / 『地方発 みんなでつくる子育て支援—上越市マミーズ・ネットの挑戦—』

解放運動推進フォーラム 41号 (真宗大谷派解放運動推進本部刊, 2010. 6)

図書紹介 『穢れと大祓 増補版』 阪本仁

解放教育 513 (解放教育研究所編, 2010. 8) : 770円

特集 若い教員が元気に育つ学校を求めて

書評 『むかし学校は豊かだった』(教育の境界研究会編) 学校のモノやコト—個別性に寄り添うこと 北川知子

解放教育 514 (解放教育研究所編, 2010. 9) : 770円

特集 シティズンシップ教育は何を提起するのか?～シティズンシップ教育にかかわる資料と解説

解放教育 515 (解放教育研究所編, 2010. 10) : 770円

特集 人権学習の教材を探る

解放新聞 2476号 (解放新聞社刊, 2010. 7. 5) : 120円
近代をひもとく3冊

『反哲学入門』(木田元著) / 『近代ヨーロッパ史 世界を変えた19世紀』(福井憲彦著) / 『経済学・哲学草稿』(マルクス著, 長谷川宏訳)

ぶらくを読む 53 「かわ」の豊穡な世界 湧水野亮輔

解放新聞 2477号 (解放新聞社刊, 2010. 7. 12) : 80円
解放の文学 51 戦無世代による戦争小説 古処誠二と『線』 音谷健郎

今週の1冊 『橋はかかる』(村崎太郎・栗原美和子著)

解放新聞 2478号 (解放新聞社刊, 2010. 7. 19) : 80円

映画 「BOX袴田事件 命とは」(高橋伴明監督)

今週の1冊 『「地球生態学」で暮らそう』(樋田敦著)

解放新聞 2479号 (解放新聞社刊, 2010. 7. 26) : 80円

山口公博が読む今月の本

『土』(長塚節著) / 『ひばり伝 蒼穹流謫』(齋藤慎爾著) / 『死体について』(野間宏著)

今週の1冊 『日本の近現代史をどう見るか』

解放新聞 2480号 (解放新聞社刊, 2010. 8. 2) : 120円

ぶらくを読む 54 「かわ」はどういう回路で部落と結合しているのか 湧水野亮輔

解放新聞 2481号 (解放新聞社刊, 2010. 8. 9) : 80円

解放の文学 52 もう一つの敗戦体験 金時鐘と『失くした季節』 音谷健郎

中世の善光寺 フィールドワーク

今週の1冊 『新・反グローバリズム』(金子勝著)

解放新聞 2482号 (解放新聞社刊, 2010. 8. 16) : 80円

山口公博が読む今月の本

『職業としての政治』(マックス・ウェーバー著) / 『新版 遠野物語』(柳田国男著) / 『道楽三昧 遊びつづけて八十年』(小沢昭一著)

今週の1冊 『国家神道と日本人』(島菌進著)

解放新聞 2483号 (解放新聞社刊, 2010. 8. 30) : 80円

大逆事件から考える 高木顕明を軸にして 1

解放新聞 2484号 (解放新聞社刊, 2010. 9. 6) : 120円

大逆事件から考える 高木顕明を軸にして 2

今週の1冊 『米中逆転—なぜ世界は多極化するのか?』

(田中宇著)

事務局よりお知らせ

9ページでお知らせしていますように本年度部落史講座PART2の開催日時が決まりました。今年は5月から7月にかけてPART1を4回開催しましたので、後半期は2回の開催になります。前半期に続いて崇仁地区に関係する内容となっています。是非ふるってご参加ください。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約15分)下車 北へ徒歩7分